公式試し読み

バンの中の象

BERND BEST

globaltalents.net

© 2026 Bernd Best

無断転載・複製を禁じます。

2026年 初版・ドイツ語原作からの翻訳

発行: globaltalents independent publishing

Globaltalents LLC・globaltalents.net

447 Broadway, 2nd Floor, Suite 703

New York, NY 10013, USA

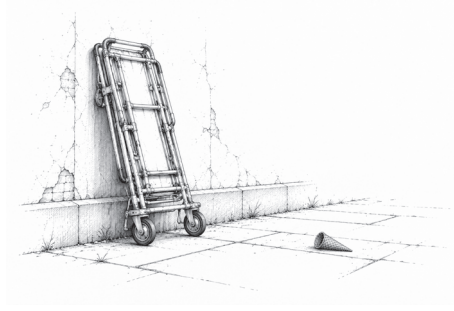
hello@globaltalents.net

イラスト: Gela Kubicki

編集: Hansgeorg Schluck

本書はフィクションです。登場人物と物語は著者の創作であり、物語の中心となる物質も架空のものです。

オンデマンド印刷手配: Bookvault



部 一
つかむ手

レバーケーゼが傷んじゃう。

イリーナ

章 1
日曜日、11:23



太った母親は息を切らしていた。日曜日の11:23。179キロの体を押し進め、ショッピングセンターから自宅のある集合住宅までの八十メートルを戻っているところだった。もうずいぶん時間がかかっていた。

外は冬だった。中庭の裸の木々には夜の氷がまだついていて、日の当たらないところではガラスのように残っていた。それでもアイスクリームを食べた。本物の、ワッフルコーンに入ったものを。

二玉。ストラッチャテッラと、新しく出た焦がしキャラメル。二玉目はカウンターの向こうの若い店員が代金を取らなかった。イリーナがいつまでも値段に文句を言うので、もうひと言聞くくらいならただであげたほうがいいと思ったのだ。その上にホイップクリーム。イリーナにとって、クリームのないアイスはアイスではなく侮辱だった。頭はもう先に進んでいた。冷蔵庫に残っているレバーケーゼ。冷たいまま手でつかんで食べるつもりだった。その隣の、飲みかけの紙パック入りワイン。夜には空になる。どのパックも夜には空になった。

朝食には昨日の紙パックに残ったワインを飲んだ。二杯、もしかすると三杯。八十メートルを歩くのがいい考えに思えてくるだけの量だった。もう誰も気づかない酔い方をしていた。いつも酔っているからだ。動作は遅く、愛想はよく、一歩ごとに顔が少し遅れてついてきた。その上の髪は、台所で染め直したものだった。自然界には存在しないニンジン色。生え際には何週間も前から、ほかより薄い色の帯ができていた。

白いバンには気づかなかった。娘からの贈り物だった。直接そういうわけではないが、中にいるマスク姿の男三人も、運転する男も、二つの数字を見ている医師も、看護師も、重量患者用の担架も、チームまるごとジェーニャが手配した。ママの減量を手伝うために。ベルトを締め、イリーナを受け止めて、何か月も続く深い鎮静の眠りに就かせる用意をしていた。

イリーナは、痩せたノロジカとIron Womanと八十年代末の最後のスーパーモデルを混ぜた姿で目覚めるはずだった。少なくとも、そういう計画だった。

その瞬間に何を感じたか、本人にも言えなかっただろう。ただひとつだけ残った。最初はつまずいたのだと思ったこと。地面が近づき、イリーナは腹を立てた。この体重で起き上がるのは一大事で、見物人までつく催しだったからだ。

そこへ手が来た。乱暴ではなかった。それが不気味だった。引っ越し業者が高価なピアノを扱うように、慎重に体をつかんだ。そこには請求書がついてまわった。四か所。左、右、脇の下、膝の裏。世界が横倒しになった。上に見える空は、冬の日曜日の、平べったい乳白色の灰色だった。誰もカーテンを開けない日の空だった。

バス停から二人の女が見ていたのは、日曜日のこの時間、この通りで見かけてもおかしくないものだった。白い車、担架、マスクと手袋をした男たち、帰り道で倒れた太った女。二人が見ていたのは救急の現場だった。片方がもう片方に言った。あの人、このごろずっと足取りがおかしかったのよ。

叫びたかった。口から出たのは憤慨したうめき声だった。レジで順番を飛ばされた人間の声だった。人影のひとつが何か言った。落ち着いた、ほとんど丁寧な口調だったが、イリーナの

言葉ではなかった。一度も習ったことのない言葉だった。ひと言もわからず、そのせいで余計に怖くなった。話せない言葉では、何も頼めない。それから肘の内側に針の冷たい口づけを感じ、怒りはぬるま湯に入れた砂糖のように溶けていった。

最後にはっきり浮かんだ考えは馬鹿げていた。浮かんでくるあいだにも、馬鹿げているとわかっていた。レバーケーゼが傷んじゃう。

バンに乗っていた人たち

ハンドルを握っていたのは、あの家では誰もが警備員としか呼ばない男だった。ほかに呼びようがないからではなく、本人が許すもっとも正確な呼び名だった。男は空の車を運転するように走らせた。

後部の、担架とタイヤハウスのあいだには医師が座り、小さな機器に出る二つの数字を見ていた。酸素飽和度と脈拍。この世に残った最後の二つの数字を見るように。この女を生かしているのは彼の両手で、車内の全員がそれを知っていた。

隣には看護師がいた。頼まれたわけでもないのに、女の頭を支えていた。発車する前には親指で口の端に残ったクリームを拭った。医師は見ていて、何も言わなかった。どの手順書にもないことだった。

ベンチに座るマスク姿の男三人は取り替えが利き、自分たちでもわかっていた。筋肉、沈黙、手袋。マスクは薬局で売っている青いゴムひもつきだった。あの春以来、男が三人それをしていても、誰も振り向かなくなった。一人が小声で祈っていたが、誰に祈っているのかは誰も知らなかった。

道中

集合住宅から森までは、地図では三時間二十分だった。四時間かかった。警備員が休憩所に二度停まったからだ。誰も降りなかった。どこかでのろのろ走る白いバンのほうが、何時間も停まらないバンより目立たない。

車内は消毒薬と冷めたコーヒーの匂いがした。走る時間が長くなるにつれ、イリーナの匂いも強くなった。何年も前から、背負うべき重さを超えて背負ってきた、洗っていない体の甘ったるい匂い。毛穴から出てくる午前中のワインの匂い。医師は担架が車に入る前から嗅ぎ取っていて、最初の三日間の計算で数字をひとつ変えていた。誰もそのことには触れなかった。暖房は二段階目になっていた。看護師は救急用の保温シートをかけていた。金色の面を内側にして。路面のうねりを越すたびに、シートがかすかにかさついた。長いあいだ、それが車内でもっとも大きな音だった。

百十二キロ地点で、イリーナの呼吸が止まった。

長くはなかった。十一秒で息が戻った。風にあおられたドアが閉まるような音がした。医師は数字を見て、時計を見て、また数字を見た。予想していたことだった。記録にあった。どちらの国の記録にもあって、誰も何もしてこなかった。この女は何年も、一晩に何度も息を止め、それでも毎朝目を覚ましていた。これから起こるすべての医学的な根拠であり、十分な根拠だった。そこが便利だった。

道中、さらに四度あった。医師はそのたびに秒数を書き留めた。

外では街が畑に、畑が丘に、丘が森に変わった。森は次第に深く暗くなり、やがて蝋燭を囲む両手のように、梢が道路の上で重なった。気温は零度を下回った。森は誰かが止めて、そのまま動かし忘れたように見えた。

イリーナを待つもの

いなくなっても、誰も寂しがらない。その計算は合っていた。

待っているペットはいなかった。イリーナのそばで動物は長生きしなかった。娘の猫はある朝、外に出してやってから二度と見なかった。ろくに捜しもしなかった。子どものハムスターは掃除中に吸い込んだ。ハムスターはケージの外にいて、イリーナは掃除機を止めるのさえ面倒だった。

待っていたのは噂話だった。年は二倍なのに半分に見える近所の女が、三日後、向かいの太った女がセンターまでよちよち歩いてこなくなったのを不思議がるだろう。一週間後には別の女が言うだろう。またあっちの国へ行ったんでしょ。認知症のお母さんのところ。マンションがあるものね。よくある話よ。二週間後には、もう誰も聞かなくなるだろう。

待っている仕事はなかった。春から年金が出ていた。二十年間、診断書を出し続けた末に認められたものだった。家賃にもワインにも足りたが、両方には足りなかった。足りない分は編み物で稼いだ。腕はよかった。役所には内緒の現金払いで、代金は毛糸代と作業時間のほんの一部にしかならなかった。残りは娘が埋めた。その娘には数週間に一度、夜中の二時に数字がひとつだけ書かれたメッセージが届いた。

娘は尋ねないだろう。この時間、娘は別の国の台所のテーブルについていた。一週間前からそこに座り、母親の居場所を一キロの誤差もなく知っていた。

空き瓶拾いの男が、いちばん長く目を向けるだろう。最後に残った仲間だった。六年間、ベンチの周りで瓶を拾い、夏には湖に行った。男は箱を持ち、イリーナは目で探した。あとから勘定をよこさずに何かをくれた、ただ一人の人間だった。瓶を換えた金を、全部、硬貨で、毎回。それから、水の垂れなくなった蛇口と、また閉まるようになったドア。この日曜日、男は中庭のコンテナのそばに立ち、車の出入口越しに八十メートルの道を見ていた。白い車も、担架も、四か所をつかむ手も見ていた。この中庭で二十年に三度、救急車を見たことがあり、あの人たちの手の添え方は違うと知っていた。だが、空き瓶拾いは警察に届け出たりしない。誰も話を聞かない。それがこの稼業だった。